

校長室だより

令和7年10月16日(木)
第25号
十日町市立中条中学校校長室

バスケットボールから学ぶこと



以前の校長室だよりも、私とバスケットボールとのかかわりについて述べました。おかげさまで日本ではマイナーなスポーツであったバスケットボールがメジャーなものへ変わっています。マスコミにも多く取り上げられるようになりました。関係者としてはうれしい限りです。私は時々審判、TO(テーブルオフィシャルといって、ゲームで得点等を記録したり、時間を計ったりする)等々に携わっています。バスケットに携わることが、ある種のボケ防止だと考えています。活動を通して感じていることをお話しさせていただきます。

バスケットボールの審判、TOと学級経営

管理職になってから、直接、チームを指導することが少なくなりました。所属校の顧問の先生方に頑張ってもらっています。ただし、大会に参加するには各チームから審判を出せねばならず(帯同審判)、そのお手伝いをしてきました。

以前、「バスケットボールの審判と学級経営はリンクする面が多い」と言われたことがあります。学級経営とは、「小学校・中学校で、学級担任が教育の効果を高めるために学級でさまざまな活動を工夫し、実践すること。」と定義され、中学校でも学校生活の基盤となる学級を、各学級担任がどう経営してくれるかが、学校経営では大きな要素を占めます。私なりに分析してみると、やはり審判と学級経営で共通することが多いようです。

バスケットボールの審判に求められる力はたくさんありますが、大きくは次の4点かと考えます。

1 ルールに基づいたゲーム運営	2 選手やチーム、ベンチ等の情報収集
3 ゲームの流れに応じた対応力	4 公平公正な態度と毅然とした決断力

1. ルールに基づいたゲーム運営



スポーツにはルールがあります。バスケットボールはコンタクトスポーツであり、ルールに従い運営しないとケンカになります。ルールは文章で書かれており、それを実際のゲームや現象にどう適応させるかが問われます。選手の能力をいかに引き出せるかも審判としての技量となります。

学級で言えば、法や条例、校則に基づいて、定められた環境の中で、どれだけ生徒に自主的な場面を与え、生徒の活動の充実度を上げていくかです。生徒の能力を発揮させる環境づくりは教員の使命だと言えます。でもとても難しいところもあります。

2. 選手やチーム、ベンチ等の情報収集

ゲームを運営するにあたり、できるだけ早い時間帯で各チームの戦術や選手の特徴をつかめるかにかかっています。特に主力選手への判定は注意しなければなりません。また、チームの戦術を見極めないと、チームの意思と審判の判定がちぐはぐになり、つまらないゲームになってしまいます。

学級で言えば、生徒の様子をできるだけ早くつかむことです。また、生徒同士のかかわりの中で何が起きているか、人間関係はどうか等を見付けることが大切です。それは、日々刻々と変化します。その変化に絶えず目を向けられるかも大切なことです。

3. ゲームの流れに応じた対応力

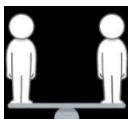
中学生のゲームは、8分の4クオーターで行い、時間に関わる細かなルールもたくさんあります。また、狭いコートの中で、10人がボールとゴールを争うので、必然的にコンタクトは起きます。その中で、粗暴なコンタクトや影響のあるコンタクトはファウルとして罰して、スムーズなゲームにしていきます。常に時間やゲームの流れを感じて判定をしていきます。



質の悪いコンタクトはできるだけ早い時間帯でファウルとして取り上げます。また、コンタクトが粗暴であれば罰します。逆にコンタクトがあっても相手の選手が影響なくプレイできるなら罰しません。プレイヤーは1ゲームで5つのファウルを犯すと退場になります。素晴らしい選手ほど審判の判定基準を理解し、ルールギリギリのところでプレイします。その姿勢を尊重し、軽く影響のないコンタクトで退場にはさせないようにします。

学級でも、活動の流れをいかにつかんでおくかが大切です。同じ行為を注意するにしても、常に同じ指導ではうまくいきません。その場に応じた対応力が求められます。全体を見ながら流れを感じながらの指導です。担任としては絶えず状況判断を繰り返しています。

4. 公平公正な態度と毅然とした決断力、判断力



審判は常に公平公正でなければなりません。片方のチームに不信感を抱かせるような言動があつてはなりません。両チームに起こった同じような現象は同じように判定することです。判定を下すときには、たとえ文句を言われようとも毅然とした態度で決断し、判定しなければなりません。毅然としない姿での判定はプレイヤーから付け込まれます。

学級でもすべての生徒に対して、公正公平に、同じように指導していくことが求められます。たとえ、その指導が最初は伝わらなくても、毅然として指導を継続することです。個々の生徒からしてみれば、「私とあの子への指導は違う」と感じる場合もあるかもしれません。そうだとしても、担任は常に公平公正を意識し、かつ流れを考えながら指導しています。

TOから学ぶこと

TOは審判を補佐し、得点やファウルの記録、ルールに基づく計時等をします。審判を同様にTOがいなければゲームはできません。目立ちませんが、地道に任務をこなしています。

TOに求められる力は、ルールに基づいた正確性が求められます。得点が入ったら、誰の得点か、何点のシュートか、何点目か。ファウルがあれば、誰が誰にファウルをしたか、個人の回数は、チームの回数はどうか。時間がルールに基づいて計時しているか等々。私がTOを担当するゲームはプロの選手が多くいます。バスケットボールで生活をしています。得点がどれくらい取れるか、リバウンド等チームにどれだけ貢献しているかで給料が決まります。だから、記録としてのミスは許されません。特に時間の管理については正確性が求められます。ルール上、残り0.3秒あればシュートができます。それ以下だとボールをたたくか、直接ダンクしないと得点になりません。ルールに基づき、時計のスタートストップも正確性が求められます。



でも人間がやることなので、必ずミスはあります。ミスがないように、ミスがないように集中してゲームに臨んでいます。審判も含めてみんなで協力してゲームを作り上げます。たとえミスをしても、確認し、正しく修正していきます。ミスをしても怒られるようなことはありません。ミスは起こるものだという考え方で対応しています。TOはイスに座っての業務なので、審判以上に集中力を求められていると感じます。その緊張感が、私にとってボケ防止の刺激になっていることは間違ひありません。

10月17日（金）が終日、県の中学校長会で出張のため、本日校長室だよりを発行いたします。
本日の合唱コンクールについては次号で詳しくお伝えいたします。

